

日本国憲法第1条には、天皇は「日本國の象徴であり日本國民統合の象徴」と記される。これを「象徴天皇制」だと誰かが言い出しこの間にやらこの物言いが定着してしまったのだが、少々奇妙である。この条文をあえてそのように表現するには、「天皇はただの象徴に過ぎない」と言いたげな底意が感じられる。

「制度」は左翼の造語である

それに「天皇制」など「普通の人までが平気で使っているが、これはもつと奇妙なこと」である。天皇制とは、天皇を「存在」としてではなく「制度」とすることにより、「これを廃絶・打倒すべき対象だと考える左翼の造語である。1919年にモスクワで創設され43年まで存続した各国共産主義政党の国際的統一組織がコミニンテルンである。32年のこの大会で「日本における情勢と日本共産党的任務に関する提議」(32年テーゼ)が発表され、その中で日本の

革命の第一任務が天皇制打倒とされたのである。ジャーナリズムや市井の人間が天皇制などという言葉を事もなげに口にするのに、私は嫌悪の情を催す。

元号が平成から令和に変わったのである。3ヵ月と少しが経つ。この慶事に國中が沸いた。久方ぶりに多くの日本人の心がともに満たされたようには感じられた。「あゝやつぱり私どもの心底には天皇といふ存在が潜んでいるのだ」という感覚が改元を機に呼び覚まされたのである。天皇に寄せて綾なす国民のこのような情緒は、制度などという用語法からはずっぽり抜け落ちてしまう。抜け落ちてしまふのは「貴い」という感覚に違いない。この貴い存在が日本にとっては不可欠なのだと私は思う。

このことをうまく文章で探し取つてくれたものが福澤諭吉の「帝室論」なのではないかと私はかねてみていた。帝室などなくとも政

せども別に不都合はないといつた考え方をもつ人もいようが、思ひちがいもはなはだし。「社会治乱の原因は常に形体に在らずして精神より生ずるもの」だと語つて、さらにつう言つ。

「人生の精神と形体と孰れが重きや。精神は形体の帥なり。帝室は其帥を制するものにして、兼て又その形体をも統べ給ふものなれば、焉ぞ之を虚位と云ふ可んや」

正論



拓殖大学学事顧問

渡辺 利夫

政治が国家と国民の統合を図れば社会は十分に機能するではないかと考える人もいよが私はそうは思わない」と福澤は言う。

「抑も一国の政治は甚だ殺風景なるものにして、唯法律公布等の白文を制して之を人民に頒布し、其約束に従ふ者はこれを赦し、従はざるものには之を罰するのみ。畢竟形体の秩序を整理するの具にして人の精神を制する者に非ず」

ものは、所詮は法律を制定・公布し、人民をしてこれに従わせると、つまりは「形体の秩序」を作り出すことを任務とする。そういう実に「殺風景」なものだといふ。法律を制定・公布するだけで「社会の衆心の收攬」が可能かといえば、そう簡単なことではない。衆心收攬のためには、形体だけではなく、何より精神が欠かせない。精神を收攬するものが帝室に他ならない、というのが福澤の主張のポイントである。

天皇や帝室などは、これが存在するのを任務とする一方、帝室は「万機に当らざして万機を統べ給ふ者なり」と言う。そのためには、帝室は「社外」つまり政治の外に存在しなければならないとのなり」を拳銃脅迫したい。(わたなべ としお)

銘記すべき政治利用の戒め

政治とは政事のことじとくに對処することを任務とする一方、帝室は複雑で怪奇なる対外交に陛下を遣わすなどあつていいはずがない。その後の著しい緊張を孕んだ日中関係を顧みれば、結果は瞭然ではないか。令和初めての終戦記念日を前にして「帝室は社外のもつたなべ としお」を拳銃脅迫したい。